

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520612

研究課題名(和文)外国語上級学習者における中間言語の研究 教材開発への応用を意図して

研究課題名(英文)A Interlanguage pragmatics on Foreign language'Advanced learners

研究代表者

大滝 幸子(OTAKI, SACHIKO)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90213751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：考察対象を絞りこむために、同一内容を母語と目標言語とで書いた作文3200篇(約90万字)を、上級レベルの日本人中国語学習者と中国人日本語学習者から収集した。その作文をパラレル形式で表示し、単語検索、誤用例TAGで検索した結果、上級学習者に顕著にみられる誤用が少なくとも4タイプ認められることを確認した。中国人学習者に頻出する誤用は、日中同形意義語と日本語の単文接続での余剰表現タイプであり、日本人学習者に頻出する誤用は、中国語での意合法に依頼しすぎるためか接続表現の省略過多である。両者に共通の誤用タイプはスル動詞の用法である。いずれの誤用についても成立原因をさらに追究するための方策を考案した。

研究成果の概要(英文)：In order to narrow down the discussion subject, we collected essays(90000 letters and characters) about the same content in the native language and the target language which advanced level's Japanese learners of Chinese and Chinese learners of Japanese had been written. By using the parallel corpus, we search in words and misuse case's tag in order to find the type of misuse. Significant misuse of Chinese advanced learners is divided into two types: isomorphic objection word's usage, surplus of connection representation. Japanese advanced learner's significant misuse is the excessive abridgement of connection representation, this is because it is relying on phrase's parataxis probably. The common misuse type is usage of complex verb"~suru". At present, it was devised how to clarify the cause of occurrence of these misuses. During this fiscal year, this project's members will write a paper for each of the issues, and shall publish as a book of research studies together.

研究分野：中国語学

キーワード：中間言語 誤用例分析 (推定)文脈分析 パラレルコーパス 教材開発

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来、X語を母語とする学生がY語を自国で学習する場合、上級レベルの学習は専用のテキストを商業ベースに乗せることができないこともあり学習者各自の多読訓練に任されていた。Y語を母語とする集団の文化圏で生活経験を積んだとしても、なお圧倒的多数の学習者はみずからの母語X語の影響から脱却することは極めて困難である。しかしその実態をしめす中間言語DATAは、採集しやすい初級レベルの学習者の中間言語DATAに比べて公開されたものが僅少である。したがって上級学習者に適格な気付きを促せる教材は未開発の状態にある。

(2) みずからの母語X語を、Y語を母語とする学習者に教える教師の教育活動と比べて自らの母語X語以外のY語をみずからと同じくX語を母語とする学生に教える教員の教育活動は、良心的教育者であればあるほどその困難さを自覚している。そういう問題意識を持ち、協働授業のパターンに属するX語とY語双方の比較対照に益する上級テキスト作成を試みようとするバイリンガル教員間の合意が成立していた。具体的には本科研の海外連携研究者と大滝のグループである。

2. 研究の目的

本研究の目的は2段階に分けて設定した。

(1) 語彙と文法の学習だけでは補いきれない思考の流れ(論理構成)の表現の方策が言語に存在し、その表現の方策が「目標言語らしい目標言語」を習得するための最後の難関であることを実証すること。

(2) 母語からの類推による誤用を排除し、目標言語において望ましいと評価される論理構成を習得させるために母語との対照研究を行い、その成果を上級作文の教材として活用することにある。

3. 研究の方法

(1) 上級レベルに到達した中国人日本語学習者84名、日本人中国語学習者80名に、10題の作文課題を与え、200~300字の自由作文を母語と目標言語で書かせる。その後両言語の作文の中の対応箇所をパラレル形式で表示できるプログラム(作成済み)を用いて、検索結果を研究の考察対象として用いる。現在、パラレルコーパス内に収録した実際に使用可能な作文数は3200篇(文字数約96万字)である。

(2) 日本語の作文、中国語の作文に各々誤用の生じやすい語句・文型を選びだし、誤用TAGを各々作る。そのTAGを用いて検索できるプログラムを作成し、検索結果を考察対象として用いる。特に訳されていない原文箇所をとりあげて、両言語の文脈・思考の順序が異なるために生じる誤用として分析する。この「回避表現」を表すために、中国語誤用TAGにも日本語誤用TAGにも同一の「冗余+(過剰+)、脱落-(脱落-)、日语直译(漢語



直訳)」を設定した。完成した検索プログラム Sachiko-Rin の仕様の骨格を図示する。

(3) 目標言語作文の論理的矛盾が大きく、評価者が文の意味を推察できない場合には、母語作文から推定した意味に基づき誤用例TAGを選定する。

4. 研究成果

(1) 母国語の論理構造と語彙の組み合わせを目標言語の作文に反映する誤用を「類推文脈の誤用」と広くまとめてグループ化した。(2) 類推文脈の誤用の傾向が、上級レベルに達した中国人日本語学習者と日本人中国語学習者とでは相当な差異が存在する。

日本語内の「漢語由来の漢語」を類推文脈で中国人学習者が誤用する率が高い。それは日本人学習者の方が「同形異議」について自覚的に学習する機会が多いためと予想する。中国と日本での教材内でどのように位置づけられているかを追跡調査する予定である。(SachikoRinを使用した関連論文が『応用言語学研究論集第八輯』に採録されている)

日本語内の「漢語または和製漢語+する>」については、中国人学習者にも日本人学習者にも誤用が多く、修得済みの「~する」形の単語構造を類推して拡大使用している。どういう漢語にこの構造拡大に拠る誤用が

見いだされやすいのか、より大量の作文 Data (中国語および日本語の学習者作文単一コーパス使用) から検証する予定である。

日本語内の接続表現を中国語作文内で必要以上に省略する誤用が、日本人学習者に頻出する。省略する原因は (b) 日本語的婉曲な言い回しの表現を放棄した場合、(B) 羅列により成立する意合法による文脈を図り間違えた場合に、大きく分かれる。意合法は従来、中国語独特の接続表現としてその存在が指摘されてきているが、その実態に関する研究は未だ不十分である。本研究で収集した data は中間言語の段階を示すため、意合法の成立過程を分析するのに有用である。

日本語作文において過剰な理由説明を加える誤用が、中国人学習者に散見する。表現したい内容にマッチする適格な接続表現を知らないことを自覚した、上級レベルの学習者に初めてみられる誤用である。思考方法としては回避の一種と認められ、この data は回避の技法のありかたを分析するために有用である。

(3)(2) で分類整理された誤用例について更なる研究を進める方策がほぼ固まった。今年度中に以上の誤用例分析を中心に据えた研究論集を発行するため、研究を分担する執筆者の確保が完了した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

大滝 幸子、外国語上級学習者における中間言語の研究 教材開発への応用を意図して、応用言語学研究論集、査読無し、第八輯、2015 年、106-114

テキ 東娜、语音习得过程中的长音化现象考察、応用言語学研究論集、査読無し、第七輯、2013 年、33-39、

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39678>

深澤 のぞみ、ヒルマン小林恭子、パブリックスピーキングとしてのアカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み、応用言語学研究論集、査読無し、第六輯、2012 年、40-53

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39714>

テキ 東娜、呉 麗楠、中国で刊行された日本語教科書における口頭発表について、応用言語学研究論集、査読無し、第六輯、2012 年、14-39

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39713>

陳 会林、梁 高峰、工学系大学の日本語学習者のスピーチ指導-西安電子科技大学日本語科の実践報告、応用言語学研究論集、査読無し、第六輯、2012 年、54-67
<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/>

[dspace/handle/2297/39715](http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39715)

陸 芸娜、習熟度に応じた作文指導 華南理工大学の作文指導について、応用言語学研究論集、査読無し、第六輯、2012 年 68-81

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39716>

[学会発表](計 4 件)

大滝幸子、<因為> 因果複句、第 6 回中日対照言語学フォーラム、2014 年 8 月 21 日、中国人民大学(中国)

テキ東娜、「V+出す」的空間移動終点表現 中国語との対照、第 6 回中日対照言語学フォーラム、2014 年 8 月 21 日、中国人民大学(中国)

大滝幸子、事象と属性の間 中国語形容詞の場合、北陸支部例会、2012 年 7 月 28 日、金沢市近江町交流プラザ 4F 集会室 (石川県・金沢市)

朱継征、语法研究成果在语言教学中的运用 怎样教学动相形式、北陸支部例会、2012 年 7 月 28 日、金沢市近江町交流プラザ 4F 集会室 (石川県・金沢市)

[図書](計 3 件)

大滝幸子編集、金沢大学人間社会環境研究科刊行、応用言語学研究論集第八輯、2015、115

大滝幸子編集、金沢大学人間社会環境研究科刊行、応用言語学研究論集第七輯、2013、94

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39425>

大滝幸子編集、金沢大学人間社会環境研究科刊行、応用言語学研究論集第六輯、2012、96

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/39425>

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大滝 幸子 (OTAKI, SACHIKO)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90213751

(2) 研究分担者

朱 継征 (ZHU, JIZHENG)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：20313497

キン 衛衛 (JIN, WEIWEI)

関西外国語大学・国際言語学部・教授

研究者番号：50319654

(3)連携研究者

宇佐美 洋 (USAMI, YOU)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・准教授
研究者番号：4 0 2 9 3 2 4 5

深澤 のぞみ (FUKASAWA, NOZOMI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：6 0 3 1 3 5 9 0

(海外研究協力者)

テキ 東娜 北京師範大学外語学院日本語系
教授(中国)

陳 会林 西安電子科技大学人文学院日本
語系講師(中国)

梁 高峰 西安電子科技大学人文学院日本
語系主任(中国)

陸 芸娜 華南理工大学外国語学院日本語系
講師(中国)